

◎グリチロン配合錠 [内]

【重要度】 【一般製剤名】特徴参照 monoammonium glycyrrhizinate, glycine, aminoacetic acid, DL-methionine 【分類】肝臓疾患用剤・アレルギー用薬

【単位】◎錠

【常用量】1回2～3錠, 1日3回

【用法】1日3回毎食後

【透析患者への投与方法】減量の必要なし (5)

【その他の報告】無尿患者でも1g/日のグリチルリチン酸投与により血漿K濃度は平均5.5mEq/Lから4.9mEq/L (1週間投与), 4.5mEq/L (2週間投与) に低下する。血圧には変動なく血漿cortisol/cortisone比が低下する。このことは腎外の鉱質コルチコイド受容体が主要な役割をなしている[ただし本剤の投与量がかなり多い] (Serra A, et al: J Am Soc Nephrol 13: 191-6,2002)

【保存期CKD患者への投与方法】減量の必要なし (5)

【特徴】1錠中、グリチルリチン酸モノアンモニウム25mg、DL-メチオン25mg、アミノ酢酸25mg、沈降炭酸カルシウム50mg含有。グリチルリチンは甘草の有効成分の1つで、抗アレルギー作用と抗炎症作用が動物実験で確かめられている。グルココルチコイド作用があるが炎症組織の再生起点を促進するところが異なる。解毒作用も確かめられている。主成分のグリチルリチンはコルチゾールの代謝酵素 (11β-hydroxysteroid dehydrogenase) を阻害し、内因性ステロイド濃度を上昇させることで抗炎症作用を発揮する (Endocrinol Jpn 38: 167-74,1991)

【主な副作用・毒性】偽アルドステロン症 [長期連用で電解質代謝異常 (低K血症、血圧上昇、Na・体液の貯留、浮腫、体重増加等)、ミオパチー (低K) など

【tmax】1hr (1) 食後に投与するとtmaxは遅れる (薬学雑誌 16: 209-16,1996)

【代謝】グリチルリチンの主要代謝物はglycyrrhetic acid。経口投与後、血漿中にグリチルリチンは検出されない (Yamamura Y, et al: J Pharm Sci 81: 1042-1046,1992) グリチルリチンはヒト腸内細菌 Eubacterium 族やバクテロイデス J-37 によって主要代謝物 18β-glycyrrhetic acid (GA) になり、streptococcus LJ-22 によってマイナーな代謝物として glycyrrhetic acid-3-O-beta-D-glucuronide (GAMG) になる。GA、GAMGともにグリチルリチン以上の血小板凝集抑制作用や腫瘍細胞毒性を持ち、H.pyloriの成長阻止、ロタウイルス感染防止作用を有する (Kim DH, et al: Arch Pharm Res 12: 182-177,2000 および Kim DH, et al: Biol Pharm Bull 22: 320-322,1999)

【排泄】尿中未変化体排泄率は1.1～2.5%、代謝物 glycyrrhetic acid, glycyrrhetic acid-3-glucuronide は尿中に検出されない (Yamamura Y, et al: J Pharm Sci 81: 1042-6, 1992)

【CL】16～25mL/hr/kg (Yamamura Y, et al: J Pharm Sci 81: 1042-6,1992) 肝炎 2.8～23.2mL/hr/kg, 肝硬変 1.4～12.9mL/hr/kg に低下 (Biopharm Drug Dispos 16: 13-21, 1995)

【t1/2】2.4～4.8hr (Yamamura Y, et al: J Pharm Sci 81: 1042-6, 1992) 肝炎では2倍の2.7～7.6hr、肝硬変では8倍の6.2～40.1hrに延長 (Biopharm Drug Dispos 16: 13-21,1995)

【蛋白結合率】99%以上 (1)

【Vd】59～98mL/kg (Yamamura Y, et al: J Pharm Sci 81: 1042-6,1992)

【MW】839.97 (グリチルリチンモノアンモニウム)

【透析性】グリチルリチンは蛋白結合率が高いため透析では除去されないと考えられる (5)

【TDMのポイント】TDMの対象にはならない

【薬物動態】長期投与の肝硬変患者ではグリチルリチン、glycyrrhetic acidが蓄積する (日本消化器病学会雑誌 92: 1929-36,1995)

【更新日】20160204

※正確な情報を掲載するように努力していますが、その正確性、完全性、適切性についていかなる責任も負わず、いかなる保証もいたしません。本サイトは自己の責任で閲覧・利用することとし、それらを利用した結果、直接または間接的に生じた一切の問題について、当院ではいかなる責任も負わないものとします。最新の情報については各薬剤の添付文書やインタビューフォーム等でご確認ください。

※本サイトに掲載の記事・写真などの無断転載・配信を禁じます。すべての内容は、日本国著作権法並びに国際条約により保護されています。